

重修真書太閤記

八編八

晴

家傳

			三四	和
		二	〇	書
	一	二	五	門
	三	六	三	
四	〇			類
冊	架	函	號	

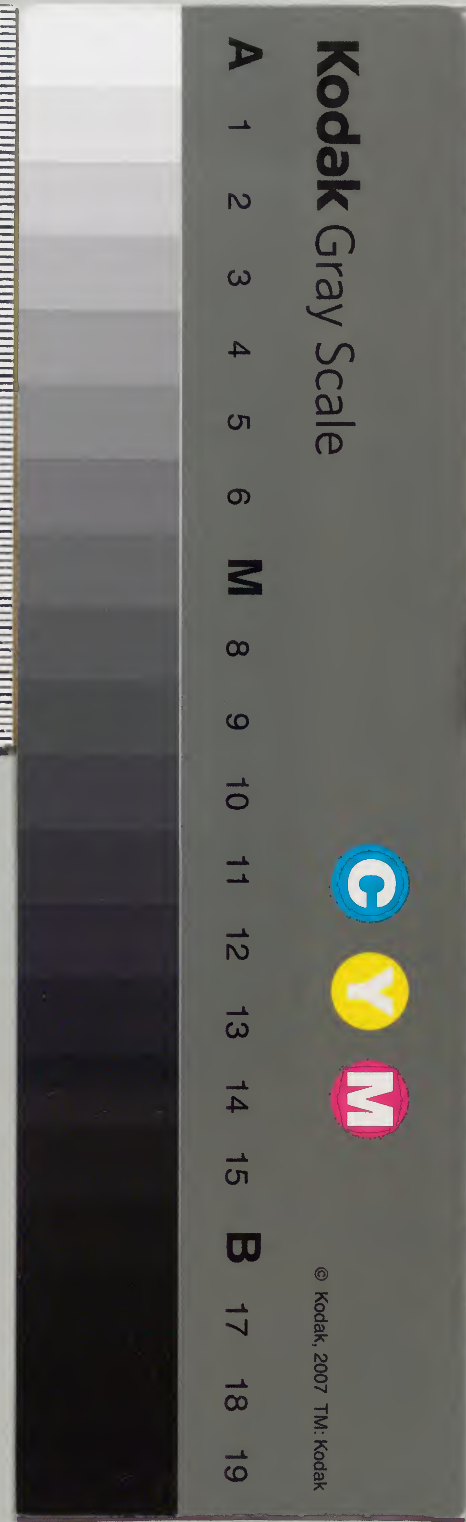
庫	文	閣	內	
一		三		和
七		四		書
函		〇		
一	四	五		
二	〇	三		
架	冊	號	類	

第七

內閣文庫	
番號	和 34053
冊數	40 (8)
函號	171 45

新刊

共四十



重修真書太閤記八編卷之廿二

羽柴於次丸秀勝東名城を襲ふ事

并瀧川左近將監夜討相違之事

瀧川左近將監一益ハ羽柴筑前守小栗名近邊を放

火せられ一石を憤りこれを追拂えんとり逆寄の

押寄なる処却て筑前守の先手中川瀬兵衛尉清秀

長岡与一郎忠興等小攻破られ刺へ譜笈の郎等多

く討て遺恨骨髓を通り口惜しとれ共筑前守

ハ三方餘の大勢あり味方ハえづ加ゆ一万の足ら

ず平場の掛合心元あり但筑前守の勢ハ勝れり

て陣中定めて打くつろむ休息あるるありんその
ところへ夜討し一戦の勝負を決すべし是去ぬ
る永祿のそとめ捕狭間ぬく右大臣殿の今川義元
朝臣を襲ひし軍法ありと云ハ谷崎忠右衛門倉地
郷右衛門門室山備中守これ承り景然るべくい
と同心しつれ共三人共浅手重手負しりのあれバ
今夜の出陣覚束ありと猶豫しける処へ嶺の城お
籠りし瀧川儀太夫詮益青地頼母宮地左内打揃て
馳来り左近将監これを見く大に驚きかども左
阿らぬ体ぬく何ゆへに城を開て出来りしと問
はれバ儀太夫頼母左近将監の書翰ぬく素名長島

の危急を告られしゆへに技城にお在て防戦せんあり
本城を救ふべき為ぬ来りしと告しりバ軍中士卒
の氣を損ずべしと思ひをく嶺の城ハ別儀ぬい
はず當所の御合戦急ぬまし由承りし間御加
勢のとめ参向しつれしりバ左近心中お嶺の城落
しり目く此者共進れ来りし者と覺りつれ共其始
末を穿議して弥味方の氣を破らんぬ詮ありと思
ひ返りし頃の契約違はず早速小加勢としり罷越
し條神妙あり但荒手あれバ儀太夫先陣としり四
百餘人を引率し敵陣近く罷向し在家へ火を掛て
焼立べし次小青地頼母倉地郷右衛門を呼其方共

二人ハ七百餘人を二手と一々左右より攻めり
儀太夫を引狭みてこれを救ふべし其内ハ左近
將監進んで是を救ふべし谷崎忠右衛門室山備中
等ハ本陣を守らすべしと云レレバ何れも究竟
の計策ありと同心し各用意おかりける然るお
素谷へ向ひたる羽柴於次丸秀勝素山修理亮中村
孫平次一氏加藤孫六嘉明二千餘人高山右近大夫
長房千五百餘人何れも船手おく山手の相番をまつ
中おも羽柴於次丸素山修理亮ハ陸へ人數を何れ
ひそまり返りて夜の更るを待居たり山手ハ明
石与四郎大谷慶松木村小早川人三百人の者共山々

峰々お走り散りて松明數百本二行お打あつく火
の手をりげよと定めたり又高山右近大夫ハ海手
小大箒を五六ヶ所お焚て大筒を透間おかく打掛
よと定めりる去程お夜も既にお夾子の刺おありし
ころ山々峰々小松明その數幾許と云とを知らず
焼つゞけ大勢の押寄る如く見えとるを素名長島
城中の者共仰天しこハ誰人の寄るおや但美濃の
味方の後誥おややく見る目どお濱手の方お鉄砲
の音頻りお聞へるおありし是ハ不思議と見渡せ
ハ大箒五六ヶ所お焚つゞけく大軍の陣取し如く
見えたりいつの間お爰まで何の大勢を押し寄るん

思ひ申寄り然バ山手の松明申定めて敵と覚へ
と如何すべしと狼狽し手足をそりぬ走り廻る
城の預日置五郎左衛門瀧川彦次郎せぬ勝れとる
剛の者あるバ些申騒がば驚かす駈廻りて下知し
はるハ汝等所の松明や大篝の肝を消さぬられハ
筑前守が昔より為得とる奇兵の術ぬく真の火勢
の寄来るぬハ非ずとれぬとを知らるゝ愚さよと
或ハ恥しめ或ハ笑ひ堀の上り櫓ぬらぐりて見渡
うちぬ於次丸秀勝栗山修理亮以下二手ぬ分れ関
の聲をりげ鉄砲をうちぬけくゝゑいゝと声をぬ
けつゝ押寄ぬバ城中の雜人大方静ありゝぬのゝ

又さハ立然バ山手の松明申海邊の篝申奇兵の
術と申思をれず真の火の大軍ぬ加こおれハ脱
れ出べし道申あし何處々敵の透とると逃出人方
を求むる其処へ羽柴於次丸栗山修理亮をや近々
と申寄て鉄砲を放ち箭を射ぬけゝぬと申城中
以の外ハ周章し防ぐべし共為ざりぬるぬあり寄
手ハ弥勢を得て既ハ三四の丸を乗取らんと為し
時ぬ日置五郎左衛門瀧川彦次郎工夫しゝ頼ぬ相
苗の狼烟を上ト加寄手これぬ疑を起し少ゝ責
口を緩め瀧川が歸り来りし時の手當をぬ又瀧
川左近将監ハ夜討の支度調ひぬるぬありすぐぬ

打立んとあつたる處へ衆名長島の留守居のりの
より早打を以て中なるハ海手あり由山手あり由
大軍寄せ来りハ必定敵と覚へハ御用心のと先早
馬を進どいさ中も果ぬハ海手より敵寄来り只今
合戦家中いいと注進す一益これを知てこハ如何
おせん假令夜討ハ勝り共衆名長島の内を攻取
れてハ詮あ然ハ早く居城の敵を追拂ハ其上ハ
て筑前守と一戦すべしよづ儀太夫頼母を大将ハ
て五千六百餘人を先鋒とあし一益ガ馬廻りハ千
八百餘人を引率し衆名長島兩城の急難を救ふべ
しと探ゆんぐ引返す衆名ゆくハ於次丸修理亮

城を手痛く攻りかども城中ハ狼烟を上げしを
見てさくハ左近将監を呼返すありん其勢五六千
も有べし味方ハ比べし對々の勢ハ合戦す
共怖しかりずたばし我々ハ只かくの如く押寄て
衆名長島兩城の者の肝を潰させかハ左近将監を
何ちこち小駈けするかせく事足り左近ハ何處
まぐ来りしぞ早々人数を引上よと下知し兩城へ
向ひし勢をよとめし船小取のり白子をさして引
返す高山ハ只篝火をのミ焼すてハ未ど大勢の屯
志とる如く見せ是由同トく船小打のハ龍川ハ形
勢を見居とり又山手小向ひし明石太谷木村の人

々ハぬけく小引返とれハ峯小由尾小由松明の燃
 さしのみぞ残りり瀧川ハ鞭小燈を合せり之立
 りみ立走り廻りて見れハ敵一人もあらず峯小焚つ
 ばけー松明も海手の篝の影もあらず益大ハ驚き
 呆れそく先城小入て留守居の者小容子を尋ふ城
 内を打ちめぐりて見ると如何小由合戦有つと見え
 堀小射とりー矢も残り爰かこ小消防とる火
 箭も有り然共奇手ハ一人も見えず餘りの不思議
 小りーや狐狸所為小やあんと疑ふも有り左近将
 監大息繼で下はるハ抑人の智慧且とせ小怖ーさ
 者ハあー昔ハ中村藤吉郎木下とあり羽柴とかを

此ぞ其身ハ同ト藤吉郎昔ハ信長公の御草履とり
 ありーが御草履とりハそれ丈の智慧炭薪の奉行
 ところれハ炭薪の智慧西國の探題職とありてハ西
 國探題の器量を顯ハ一今又天下の御後見と一く
 神変不思議の奇計を施す一益もども尋常の侍小
 てハあかりーが筑前守小斯まで自由小操られー
 口惜さ此定小くハ我等あんど此人の門小立あ
 りん口惜共悔ー共云べき詞を知らば去とて如何
 せんとして閑小城中へ引入士卒の疲を休息せーめ
 長島の城を開き瀧川彦次郎同儀太夫及びあ素名へ
 籠らせ軍の評議を疑ーり

六月廿八日

六

筑前守謀略瀧川を若くはむる事

并瀧川主従衆名退去の事

羽柴筑前守の先陣中川瀬兵衛尉清秀長岡与一郎
忠興二陣蜂屋出羽守頼隆いづれも昨日の軍小瀧
川勢打ちよき者多く討せされバ必定夜討小寄
るありんと思ひしバ鎧の上帯つよく志め馬の
腹帯もゆるめ待たれ共衆名勢さう小音もせば
らまつさへ左近将監陣を拂ひく本城へ引返へ
はる小より其あしを筑前守の本陣へ告知らせ三
人ハ朝明郡富田よぞ進で陣をとり後陣の一左右
を待居とり然る小羽柴於次丸秀勝素山修理亮等

本陣へ参向し衆名長島を十分の調略あり敵を怖
させ軍勢を引上げし容子を委しく言上あり去り
ハ筑前守大い悦び其競ゆ今少し陣を進むべし
とて四日市へ移し衆名との間三里八町あり
詰りれ瀧川衆名小籠城せしと聞いざや一責せり
て見んとまづ軍勢の手分をこそハありしりれ
先手の先鋒ハいつも中川瀬兵衛尉二陣ハ蜂屋出
羽守搦手ハ長岡与一郎衆山修理亮羽柴於次丸秀
勝三陣ハ中村孫平次平野権平片桐助作段々小續
さ其次小総大将筑前守秀吉陣をすく先左右へ下
知を傳へられ旗本ハ加藤虎之助福島市松石川

兵助脇坂甚内加藤孫六前野勝右衛門石田左吉そ
の外いづれも一騎當千の勇士あり軍奉行の増
田仁右衛門小西弥九郎熊谷内膳粕屋助右衛門軍
目付の杉原七郎左衛門尉家次これハ七郎兵衛
家利の嫡子ゆる浅野又右衛門が妻及び朝日殿の
弟多れハ筑前守の北の方の叔父ゆぞ有り又荒
木平太夫を添られり其勢都合三万八千餘海手
へハ九鬼大隅守嘉隆高山右近太夫長房兵船百餘
艘を漕つり裾り大旗小旗山下風小吹あびかせ
又波のうめく浮ぬ流れぬおびとぐ一乗名の城の
三方を取圍み次第くお攻近付り左近将監由

智謀すくれりのあれば海陸の寄手の手當をあ
し今やくと待あけり筑前守の勢海陸より攻
入て在々所々を放火し堂社仏閣を追捕し鯨波の
聲を揚攻鼓の音喧しく寄りこし思むれ共敵更
お見え来りば一益も筑前守のこめゆ度々敗軍志
つるのえりず龜山の城を落され嶺の城を計略
せられ儀太夫以下落来りく爰おり長島乗名兩
城へ勢を分て軍せん中難儀あり如何せんとなり
はる時甥の瀧川彦次郎光益進み出てりはるハ兩
方の軍議相違し筑前が為お不覚を取りりこと
返すくも残念ふハゆへ共是又時節到来とすべく

大関巴八編卷廿二

い我々も、い譜代の者ハ両城ハ引分れて軍仕ハ
 共死を軽んトいと尋常の習わく更ハ珍ら〜から
 ずさりあがり下々の者ハ大軍ハ恐怖して一向物
 の用ハ立べく申いと、某愚案を廻ら〜ハ尾州
 海東郡蟹江城ハ要害宜〜ハハ両城を捨て彼
 地ハ御籠ハハ、必定御開運とるべく存いとかく
 する内ハ柴田ハ出張仕るべくハ左ハハ、筑前
 江州〜引返〜可〜ハ其跡めく又両城を取かく〜
 いもん〜何の難きと〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ
 引退〜ハ〜ハ思寄ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ
 城をす〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ

鋭氣を避て味方の勇氣を養ふ一端ハてゆとけ
 れハ左近將監よハハ不平の氣色ハ〜ハ我織田家ハ
 仕〜ト〜功勞を積て東國の管領職とあり〜身
 右大臣殿御事〜ハ〜ハ後御弔の為ハ馳歸り〜ハ
 遠路と云ハ不運〜ハ〜ハ途中様々の事ハ出會延著
 ハ及ハ〜ハ筑前守ハ恥〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ
 婿君ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
 遺恨云ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ
 山嶺の両城を落され又棄名長島を棄んと近ごろ
 以て残念あり〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ
 當城ハ楯籠り筑前守を引請快く一戦〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ

あはざる時ハ城ハ火を掛腹切て身を滅ぼし名を
 後代ハ残すべし其方達ハ心のおし立退さあへ
 といひ棄其座を立後の障子を引りけ奥へ入る
 バ並居し侍共示とく其あし退出志とりりり免角
 するうち夜明はれハ筑前守の軍兵開をりけ鉄
 砲を打ちけり攻寄はるを見て城中の兵士ども堀
 小上り櫓小登り寄手の陣を見渡す海上ハ兵
 船いくりと云數も知らぬ漕つり子陸ハ大旗小
 旗家々の紋を書て透間もあく楯竹束をみつぎつ
 れゑいしし声をりげり寄とりりり城中の兵士共
 何の大勢ハ向く何と軍のあるべきぞいかゞハセ

んと手ハ汗を握り只落支度をのみぞ志とりりり
 城の大手の預日置五郎左衛門室山備中瀧川彦次
 郎同儀太夫をりり廻りく下知しはるハ寄手多し
 とりりとも皆近國の仮武者しりり只人あまハ関
 の声をりぐるばりり實ハ心を戦ひハ入る、りの
 あり面々爰を恠よサグく運を開くべきぞと士卒
 をもげまし是を勇めて持場くくを固めさせ防戦
 の術を盡しはる中ハ伊勢國住人小林直八郎正
 道木藤藤左衛門繁房兩人強弓の精兵ありはれハ
 大手の櫓より大矢を射出しはるり近々寄とる
 勢ありハ一矢ハ二人三人手負ハりれ共仇矢ハ更

小無りりり中川瀬兵衛これを見て城中の射手ハ
只二人ぞさのえ恐るゝとハ味方の火箭を射る
人ハあさりと走り廻りく下知りれば中川が
手の兵承をりいと云中りつて七八人思ひく火
箭を射りハ櫓の軒小燃舟とり城中小てハ是を
消んと立騒ざれる処へ本陣より平野權平長泰使
小来り好む処の十三束三伏鳥獵根の二三寸むか
りあるを白滋藤のきふうち番ひよつ引兵と放せ
ハ誤とず小林直八郎が胸板のむづれより押舟の
板迄鏃白く射出しとれハ何ハ以てたまるべき
櫓より真逆小落て死てりり中川が手の者これ小

大岡記八編卷十二

氣をえく競ひかり息を由繼せだ攻はる小より
城中以の外難儀げ小見え既小大手の門打破りつ
べかりはる時本陣ゆく引螺を吹立し加ハ中川が
勢由心あらば攻口を引退さ本陣へ馳集る城中小
ても何とと思ひけん切ても出ず追せだ相引小
こそありゆれば然る小瀧川方小く川室山備中日
置五郎左衛門尉瀧川彦次郎左近将監の前小出て
りや今日合戦味方母とく難儀の処小林木藤
が弓勢小より一防ご防ごていひを平野權平が
為小小林射落され大手の門すぐ破られいせん
と心を苦しめり時筑前守い加ある心や軍兵を

大岡記八編卷十二

二

引りげてゆその軍略よと不審ゆりや江州
邊小内乱の起りて急小引返すゆやと推量仕るゆ
緩くと兵糧炊く烟も立陣中如何小も静く小見え
てゆ左すれハ内乱共思もれず筑前守ハ三四万の
大軍あり此方ハもづハ六七千ゆ足らぬ然ハ
爰小て防戦其詮あく覺へゆ早く蟹江へ御引取彼
地ゆ防戦の便宜を得ゆうち小岐阜又ハ柴田の
後援ゆゆべと勧めらるゆあり一益ゆ漸く退屈
つるゆや然ハ當城を開て堀江ゆ入べ然るが
り筑前守の陣へ一當りて一其うちゆ落行くべ
と評定一夫一龍川彦次郎室山備中を先陣とあり

て三百餘人その夜三更ゆ打立中川瀬兵衛が陣へ
面ゆあらず切て加一區清秀あゆより龍川夜討
小寄るありんと用心せとところあれ共これ月ど
小勢ありんとハ思ひゆ寄ずされハ同士打と陣
中以外の混雜す龍川ハ只寄手の陣を一さハさ
さもおせ一迄ゆ人数を引上城中へ引入さ寄手
の陣ゆハ宵より筑前守嚴重ゆ下知ゆゆるハ今
夜加まりゆ夜討有べ但一當陣の外みどりゆ出
會とあこれと有りゆるゆより中川が陣をありゆ
てその餘ハ者づありあへつと扣へゆ龍川ハ城
中ゆあへり寄手へ一りて當れとゆられゆどの大

戦ふれハ切勝んとありひも寄すいぐや蟹江へ引
のくべいと云ふとこそわれ我先のと舟小飛のり
水門より出て落小りり又筑前守の陣へ北國勢
出陣の注進ありりるふより責ありり軍勢を引
上りありりころへあハ瀧川衆名不安堵すべりけ
るりのを運の傾くところ人力あ及びがごとハ
かゝることをやべと

重修真書太閤記八編卷之廿二終

重修真書太閤記八編卷之廿三

筑前守秀吉賤ヶ嶽備立の事

并柴田羽柴先陣手合戦の事

羽柴筑前守秀吉勢州へ出張亀山峯の西城を落
柴名長島西城小向て海陸の奇兵を發瀧川左
近將監を脅か瀧川夜討を謀れバ先達て遠算を
焚て其氣を碎と終小柴名城を圍んで其士を困め
其勢を屈一城を抜んとするふ及ぶや江州長濱の
柴田伊賀守の家老徳永石見守神谷越中守濃州大
垣の池田勝入齋をよび岐阜小向ひ羽柴美濃守

の許より越前の柴田修理進北陸道の軍兵を引率
一江州柳ヶ瀬へ出張し彼邊を放火するも注進
櫛の齒を引ぐ如くありし加ハ筑前守諸將お下知
一虎口を引き入りぞかき入りありしれも無体ゆ攻
詰らりハ瀧川ハせぬここへさる勇將あり定めて
必死とありく軍を挑むべしりし者かりハ味方の
兵士も多く損じそのうへハ日敷を送るべし柴田
ハ短氣猛烈の大將ありすでお柳ヶ瀬へ出張者と
らんぬハ進みく濃州へ切入り岐阜の後援をすあ
るべし然らハ岐阜をかこみし美濃守秀長も難儀
ぬ及ぶべく此と瀧川方へここえぬハこれぬあり

て瀧川もこ一計をすありん然ハ味方の軍を小
六ヶしかりし令この虎口をゆる免さるハ瀧川
籠城おくるし退去のしるぞしを起すりさゆ
あくハ切て出無二無三ハ死生を決するありん志
かりハ自然と衆名長島両城ハ當時の持とあるべ
一此二つぬ違ふて瀧川當城を守りありハ押のこ
り大將一人二人を殘中置筑前守ハ江州表へ進發
すべしと評定一決りしハ果しく左近將監主役
をつかの號めて夜討しれハ筑前守すハや瀧川
當城を落るありん必ず追をかれと下知せられ
られハ諸大將いづれぬその首を守りて今やく

と待し加ど中城の志づかゆして音もせぬ夜
りけて見れば城中の松杉の立樹も立そひ大旗
小旗のうへお鳥の多く棲とるを見出しとてハ
龍川落とるおやと中川瀬兵衛堀の上り城中へ入
てみるお人ハ一人もあいつの間お落とりけん
流石甲賀の瀧川左近忍びの術お熟とるととるハ
バ感心一筑前守おかくと告りハ筑前守これ
を聞てこれ當方開運の前表ありと深く心中お悦
び次小峯龜山お向ひ諸將を呼返し西城をバ清
洲おありお北畠どのへとて筑前守ハ濃州へ
至り岐阜をかこみ諸大將を褒美しそのうへお

て筒井順慶法印と蜂屋出羽守を美濃お残しかさ
次小手配をあてて柳ヶ瀬へ出立り相従ふ人々
ハよづ一番お筒井伊賀守定次七千餘人島左近友
之松倉右近勝重西人の勢二千餘人合せて九千餘
人との次お長濱の守お神谷越中守大鐘藤八徳永
石見守三千餘人二番お赤松次郎則房蜂須賀彦右
衛門正勝父子二千七百餘人三番お木村小隼人重
綱堀尾茂助吉晴前野勝左衛門三千餘人四番お一
柳市助直盛淺野弥兵衛長政生駒甚助親正小寺官
兵衛孝高明石与四郎則遠五番お木下勘解由左衛
門尉同將監大塩金石衛門山内猪右衛門一豊黒田

吉兵衛長政中村孫平治一氏合せり一万二千六百
 人六番小高山右近太夫長房千五百餘人七番小堀
 久太郎秀政仙石權兵衛秀久千六百餘人あり八番
 ハ赤松弥三郎則友神子田半左衛門千七百餘人九
 番小栗山修理亮廣長長岡与一郎忠興三千餘人十
 番小中川瀬兵衛清秀羽田長門守義真二千八百餘
 人十一番小三好孫七郎秀次小川土佐守重光大谷
 慶松吉隆熊谷内膳直賢三千二百餘人十二番小羽
 柴美濃守秀長同於次元秀勝一万二千五百餘人十
 三番ハ総大将筑前守秀吉の旗本ありて小姓馬廻
 ハ加藤虎之助清正石川兵助貞友平野權平長泰加

藤孫六嘉明福島市松正則脇坂甚内安治粕屋助右
 衛門武則田屋右馬之助兼政平野九右衛門政重淺
 野八郎左衛門以下一万五千餘人後陣ハ杉原七郎
 右衛門荒木平太夫三千餘人兵糧小荷駄を奉行せ
 りその勢都合八万九千二百二十餘人江州柳ヶ瀬を心
 ざし進發せり

甫菴本一一番堀久太郎二番柴田伊賀守勢三番
 木村小車人堀尾茂助木下将監四番前野勝右衛
 門加藤作内淺野弥兵衛一柳市助五番生駒甚助
 小林管兵衛明石与四郎木下勘解由左衛門尉大
 塩金石衛門尉山内猪右衛門黒田甚吉六番三好

孫七郎殿中村孫平次七番羽柴小一郎殿八番筒井順慶九番赤松次郎蜂須賀彦右衛門尉伊藤掃部介十番赤松弥三郎神子田半左衛門十一番長岡与一郎高山右近太夫十二番羽柴於次九仙石權兵衛尉十三番中川瀬兵衛尉其次ハ秀吉小性馬廻リヲ鉄砲一万五千を三段小備へ一が十三段をハ峯より峯を傳へ小鶴翼小備へてはれハ北國より察しみるをまちくゆく十二万餘騎と見るゆり又十萬小及ぶべと云中有りるとあり秀吉の先陣八頭ハ弓鉄砲あり敵味方先手の間十町小過べかりず鉄砲足輕のみありて

其日ハ相引の志とりり敵合戦を挑まんありハ勝負までこそあく共をつれの合戦ハ有べきあり然るを敵とり合ざらハかほつ加あく秀吉郷思名翌日未明ハ足輕小まざれ古老のりの十騎むかりゆつれ峯小よぢのぼりて敵の屯を見あふとりり然る小佐久間玄蕃允盛政前田孫四郎利長行市山小陣を居後陣を待合せて攻上らんと擬しとあり小不計中前田孫四郎道中の餘寒小當り病氣以の外ありとて越前へ引返す佐久間玄蕃允ハ邪智深き性質ゆへ前田ガ陣所へ至り病体を見ゆる小い

か小由難儀の容体あれバ果てを帰りたり
 然る小越前より浅見但馬守前田小加をりて参著
 一柴田小由當表出張をいそ加れゆへ共餘寒強く
 持病再發いたされい間今日明日の参陣か目つか
 あしとりゆるゆより盛政大さ小驚ろさあがりさ
 る勇士あれバよづ秀吉の陣取の様を伺がひれる
 小十三段の備を二つ小かけ六番までハ筒井を先
 手と一西山筋小をふく押よせ七番より十三番ま
 での勢ハ堀久太郎を先陣と一東の道筋より押と
 りりり筒井が勢ハ堀が勢より三町ハありゆ先達
 東野村ゆく待合せと一後陣の勢ハ天神山小陣を

とり前六段の人々ハ川を前へ當て東へ舟で屯を
 張るるが筒井の勢の内より七八十騎行市山の麓
 一障取一ハ誰るるりんと能見れハ松倉石近勝豊
 飯田三郎次直宗ありやがく佐久間が備を目ゆか
 け今市の原まで押出一関を作り鉄砲を打かくれ
 ハ佐久間勢も劣りゆと足輕を出しと打合とり堀
 久太郎秀政三千餘人の内より家臣奥田三左衛門
 百騎をかりを引分けく押かけり越前勢と戦へハ
 越前勢も同く鉄砲を打く揉合月さ小三左衛門
 かくてハ果すと人数をもちと切りるを佐久間
 何とく思ひにん人数をよこめて引取と一奥田追

討小せんとすむを秀政これを止め追せせ
これハ偽り逃て勝小乗とこ大返小返さんとの
謀ありいごや軍をよとめく敵の形勢を見べこし
こて筒井勢を由諫めてらり引小引返小かのく
役所小箒を焚さ用心嚴重小白眼りあく備をこく
と

筑前守斥候の事

并賤ヶ嶽所々普請の事

筑前守秀吉ハ翌十二日の早天小竹中與右衛門尉
重信石田左吉加藤虎之助片桐助作以下僅小十五
六人を名具一足輕小紛れ行市山のみよ小忍び上

り敵陣を見積りのふ小越前勢追々小馳上りしと
見え谷々峯々いづくもく軍兵の陣をとりぬと
ころもあ一其次第い加小行届こく透まろよを
心中小深く感竹中與右衛門小其方ハ伯父重治
ガ傍小ありつれハ兵法の荒もくもま、知さるあ
らん斯の如く山間の谷間小陣をとるををあうひ
つるやとありける小与右衛門さら小承をりしと
ゆいむずとせし加ハ筑前守莞爾と笑ひその方
知さるとハ有よドそれハ我小對しての礼義ある
べし我その方の伯父小さ、しとり今越前勢の
陣ハ魚鱗鶴翼雁行長蛇の法小非ず谷々小分けて

陣と陣との間離れぐいこれに攻る小易く救ふ小かたく見せしハ敵を欺く希代の手配り並々のりの一及ぶところ小非ず能く心を舟て見習ふべしと教へしひそれより本陣へ歸り舎弟美濃守秀長をもちめ素山修理亮以下諸將を呼らつめ昨日手合せての軍小玄蕃が急小引とりしといか小も心えがさく思ふ小より足輕小よざれて敵陣の体を伺ひ見し小玄蕃が勢を引上しと真小そのことより有しあり然る小久太郎早く見積りしとみえて奥田三左衛門を呼止め且筒井勢を引とりて一と感心せり久太郎ハ如何小しと是を知りしと

やりん怖ろしくともく勝家ハ剛勇一途の士と思ひつる小この山間小陣を取れば心中を察す酒の深き慮りり輕くと思ひ悔つらうとす其のへハ其をこのところ小永々とつり置さるれさそひあくらんとさ易らけ小軍をりちるこの谷間の難所へ引入れ前後より挟み討んと謀りしあり危ふありし軍立ちあ我昔竹中半兵衛おさしとけり我をあり彼を知りハ百戦百勝といへり實る引る我りし彼の人のいりるを察せん我一人の心いるをりつて軍をいどまハかまりけり谷間小引さ入れられ火攻おらひあまし志ありハ我の又むあり

どを工夫し得たりまつ賤が獄木の本の山小附城
を築き所々要害をかまへ柵をめぐり嚴重なるを
へて勝家の出陣を押しふべしそのうち我濃州を
平均すべし面々油断すべかりんと下知しあふ諸
大将いづれも筑前守の調畧の奇なるを知らずと
いへどもこの度の如く難儀なる戦場をかたぐと
かりひをかりるゝ如何なるこゝろおぼるるや
んと疑ッひるゝ筑前守のさし置ふ志とがひ木
をとりたふして堀をほり橋をこし晝夜の志や
別るく砦の普請を急ごりり元来筑前守ハ當国小
久しく住るれて所々の案内をハ知りとり敵の焼

のこゝとる堂社佛閣の餘材を取りとりあつハ
何の山の巔小大ひある石あるべしこれをとつ
門の前小置へしこの谷の奥小かくのごとさ大岩
りらんそれを使い小櫓をかまへよと事こまや
小下知しあふ在所小老ひとるりのさへも見ゆせ
ずき、ゆかよむぬ小山々谷々のつまりくを知り
あふそのつのみあふと皆人かちかそれくりし是
ハ長濱在城のごと政事の暇ごと小山野をかやま
たりあひしが今日の為とハ誰たり知べき長濱在
城のころ百姓をよく懐けられ浪人を扶持しあひ
神主社人まで其月ごとく小舟で思を与へあひり

ハ紫田りちとありてハいづれも本意をさそふ思
 ひ居とりしハ今日かくの如きと出来て筑前守の
 若を普請さうるよ人をさくより昔のあさけを思
 ひ出し今こそ報恩の時ありと招きさるふかびた
 だしくあつあり我もくと出情し若勞をいとえず
 働さるふより日あらばくく堀土手出来りく
 南菴本ハ伊賀守勢を入置し天神山の城ハいさ
 さり出過益ありとて十町をかり引のけ本山ハ
 要害をこしらへあふたの山をゆりく丈夫ハ
 こしらへ堀久太郎を入置まづが嶽尾崎中川瀬

兵衛尉その尾七八丁も隔つて高山右近大夫賤
 が嶽の城ハ美濃守内兼山修理亮田上山ハ小
 一郎との本陣として居城あり遊軍ハ蛭須賀彦
 右衛門の尉生駒甚助神子田半左衛門尉赤松弥
 三郎明石与四郎小寺官兵衛その勢一万五千あ
 りいづれぬより弱きところへ助成すべしと
 のとあれハ木本邊ハ宿陣あり海津口の押
 込ハ丹羽五郎左衛門尉一万長岡与一郎三千ハ
 ハて固めとりと見ゆ
 佐久間玄蕃先盛政ハ筑前守戦をいごり陣をか
 とめ若をこしらへ附城を築き連綿と要害を構へ

普請をいそぐを見るときそのまゝ飛脚を以て勝家の
の如く一注進まらふハ秀吉出陣しつゝ一向戦
ひをいどみ中を多くた、陣中を堅固小守り柵逆
茂木を引ての上小去つが嶽木本山ニケ所小若
をかまへその外窮く小連さの要害をかまへりて
全く當方を押へんり為とみえりこの普請半由成
就ふ及びハハ筑前守ハ歸陣とお思えりあらく
りつゝこのところ小筑前を釣りかこりてかあふ
あづくハ筑前ガ勢とも件の要害小こりり堅固小
守りハハ當方美濃へ打出るとも上方へ上ると
もあるまづくハかの普請をさまどげ急々合戦を

とげハ(チ)計畧つかまゆりたくハ早々御出陣
るべくハ御油断ハハ御大事ハ及ぶべくハ中
ハハ勝家これとさ、某所大と全快せり
ハ近目出陣せんとおひふところハ盛政かくの如
くハ越しとり何さま筑前守合戦をいどあは要害
を普請するハ當方の計策を大と推量せりとか
思へとり謀りるハ時ハ事かあるハ筑前守ハすむ
やさりのあり何の目ごふ々恐びを入れてさ、出
しつと知りて如何せん賤ガ嶽ハ江州第一の切処
ありかこりこハ三四千の軍兵を籠とらんハ容易
小攻破ぶりかこりらん去るがらこのありハ止べ

さ小阿らぐとて三月十八日北庄を立ちりみおゆ
 んで馳けとくく十九日おもと柳が瀬のりち中尾
 山小著陣一先陣へ此よを告軍評定およびけ
 り
 一書お三月十八日の天時を考ふるお五宮甲子
 あり中宮を甲子將の泊処とく六宮を甲戌將と
 一七宮を田申將とく八宮を甲午將とく九宮を
 甲辰將とく一宮を甲寅將とく四宮ハ乙あり
 三宮ハ丙あり二宮ハ丁あり北庄より柳が瀬ハ
 九宮離お阿とく甲辰將の位あり柳が瀬より北
 庄ハ一宮坎お阿とくすあそ甲寅將の座あり

甲辰土將を以て甲寅木將を伐利あるべかりぐ
 と云ひ一人阿つれと中勝家用ひず遂に敗走
 去る身死し國滅るゆいとると云へり
 又一書小勝家出陣せんといひ日次を問お中村
 文荷齋云く三月ハ晝の間孤小向ひあふよろ
 かりず然とてこれほど小觸れ催あしとく大勢
 をいかゆあしあふべさ天時中人和おあかずと
 中左サりのと小泥み多急と御出陣ゆべく
 とりせし加ども免角勝家延引お及びあひと
 由いへり
 流布本小斥侯の論たり浅層用ふる小足すより

て是を削る
 甫菴本ハ秀吉二月八日江州長濱ハかりむさ
 り柴田ハいまだ北の左ハりといへども佐
 久間玄蕃允大将として二万餘騎を率て天正十
 一年二月七日木の下邊ハ至て出張すべきとの
 用意あり云々七日の拂曉ハ立出木の下さして
 出張す同十日天神山木の下兩城ハ押への勢を
 置つ、玄蕃允働りさりりこのとびハ井口川を
 切て放火せんとの議定あり、前田孫四郎深
 入て関ヶ原近邊まで放火し勝とさをちげり
 とりあり云々秀吉翌日八日龜山の城あり江

北さして打とせあふ十日の暮日と小長濱ハ著
 て玉藤川井口近邊今日放火いとつる由さ、
 あふくさくも残り多きと加ふ今半日早く著陣
 セバことごとく討留べきりのを足摺をく千
 悔いあくとゆかひあかくて翌日あづがとけ
 近邊へ押出し総軍勢を十三段ハ備ふと云ふ

重修真書太閤記八編卷之二十三

Faint handwritten text in a rectangular frame on the right page.

重修真書太閤記八編卷之廿四

筑前守賤ヶ嶽人數配の事
并筑前守密小濃州へ帰陣の事
去程小筑前守秀吉ハ賤ヶ嶽木の本兩城の普請大
形小出来せし加バまたく賤ヶ嶽小昇り味方の
若々を巡見りり良久々四方を見とた何々工
夫あしめあ体りりる早々本陣へ歸り入りれ
大岩山岩崎山の兩処へ岩を築くべし
出来し下知し即筑前守の得とる割
普請の法を用ひて數千の人夫を呼出し何某ハ堀

大隈言八編卷七十一

ほれ誰某ハ枕うて彼奴ハ木を切とすさまあく沙汰者あへバ三時をかりがほど小若の形勢をありてルリ是天正十一年三月十九日のてあり然る小筑前守ハいつも忍びゆるれいゆのを百人中二百人中つかえれ程小柴田が北の庄を立ち今日柳瀬へ著陣せしとを疾く知とりはれバ又例の人夫小紛れて氷室小とある篠尾崎へうちの月り中尾山の勝家本陣をうめひあふ小本陣ハ煙かびとく立上るこれハ何さま夕景の飯を炊くあるべし三万余騎といふハ真小さも有べし實中北陸道七ヶ國を切平けよと故殿の御許りり

理ありやと隈もあく見とてさて本陣へ立帰り諸將をりつる中されはる先小中せし如く勝家某を釣かかんとして佐久間を先陣とし谷間々々小勢を分置とれど中某何とて勝家の術小乗て釣るべらんや但勝家足長々と當國ハ出張し中尾山小陣をとり我又一手とて勝家をかの山あり此方へ一足も踏せよと思ふあり然らばよづ東野山菅蒲谷の要害ハ堀久太郎秀政の勢ハ予鉄砲のりの百餘人を添く籠置くべし淡海國面をみれば柳瀬の内ハ大谷今市中郷東野と越前街道ハ續きとて輿地志略ハ東野村

古城跡民家の東の山小りり志津嶽鬪戦の日堀
 久太郎秀政陣城の跡ありと云
 堂木山の麓大杉山小ハ山路將監正國同トく右の
 方小ハ大鐘藤八一段上の方小ハ蜂須賀彦右衛門
 正勝父子その左の方の尾崎小木村小隼人重綱東
 野山の要害より尾崎續つづ小堂木山の麓まで柵を
 あり中目どゆゆ又一ツの砦をぬまへ小川土佐守
 忠則を籠め置とり
 堂木山ハ東野越前守入道道義の城跡あり因て
 道義山と書を本とす大杉山ハ川並村八戸村等
 の西あり山あり文室山のつゞこの山ありと

いふ
 賤しんゲ嶽たけハ素山修理亮以則羽田長門守義真淺野
 弥兵衛長政等をさし置れ餘湖の海山の南大岩山
 の新砦小ハ中川瀬兵衛清秀を籠めりる中川なかつガ砦
 より八町ほど隔て岩崎山の新砦ハ堀の土いまだ
 乾かよど大事の処あれはとく高山右近大夫をこ
 りられとり田上山の舟城小ハ羽柴美濃守秀長を
 こめりる此城ハ少く廣き芝居ありしかハ筑前守
 の旗本衆を少々さしそへられとり天神山の砦小
 ハ柴田伊賀守家老三入木下勘解由左衛門尉を
 加へりる山内猪右衛門小寺官兵衛黒田甚吉生駒

甚介赤松弥三郎等ハ遊軍とあり弱カウん方を救
ふべしと定められ筑前守ハ猿ガ馬場ハ本陣を
居られ居る所ハ兼々の約定を違へず丹羽五郎左
衛門尉長秀海津口より越前敦賀へ兵糧を廻らす
よし注進有りれば秀吉大カよろこび長秀の實
意厚きを感ず長岡与一郎忠興を召あふて急ご
本國へ引返し海手より丹羽五郎左衛門尉カ力を
合すべき由を示しければ忠興承り早々丹後へ
引返すこのとき美濃の押ハ池田勝入齋父子稻
葉一徹入道両大将ありける池田稻葉の許より
早馬を立て勢州を退去せし瀧川左近將監一益先

度素名小く敗北し夜ハ紛れく素名を退去しつる
恥辱をすいがんとて尾州海東郡蟹江の城ハ楯こ
りり近隣を放火し不日ハ清洲へ乱入せんと計り
これハ依て尾州以の外騷動ハ及びハ早くこれを
退治せずんハ岐阜と相議し両方より江州へ打入
可しハすくおさぬハ海東海西二郡ハ云ハおよ
ハズ粟栗郡より濃州まで瀧川ハ一味同心仕べく
ハと注進志しりければ筑前守莞尔とうちこりハ
さハあへ人々よ瀧川素名を退去しつるをこの為
ありたり是をかりてハ疾ハ定め置たりかくてハ
瀧川ハ智恵ハ計り知られたり然らバまづ瀧川を

かて付て後柴田と一戦あり及ぶべしあり油断あり
か大将とちとて若々の掟たしあか沙汰しあひ三
月廿三日柳ヶ瀬表を出立りて濃州大垣へ歸入
り

柳ヶ瀬より木本小谷春照藤川関原より垂井を
經り大垣まで十五里半十二町あり
然る小越前勢ハいよご此義を知らば若々の普請
由半ありはあころ出張せし行市山の佐久間玄蕃
允別所山の拜郷五左衛門山寺山小ハ原彦次郎氏
次池原山小浅見但馬守中谷山小金森五郎八入道
大谷山小不破彦三元治椽谷山小徳山五兵衛中尾

山小柴田修理進勝家旗本を居とれハ安井左近安
近柴田三左衛門以下谷々峯々小陣をとり敵寄せ
ハこの谷りひ小誘びさ入れてうち取らんと構へ
とり又前田又左衛門利家ハ病氣小因て越前府中
小有りはるが少々快方ありはる小より出張し
両陣の容子を窺ダヒはるところ去ぬる十四日子
息孫四郎利長寒氣小とりしとく本國へ引返し
府中の城小入て養生す然る小羽柴筑前守より密
小羽檄を飛し又左衛門尉柴田の旗下小在てこの
度の軍小從がひとまをぐ出陣遅々ありハ所見何
りと覺へて天晴天下の神智名譽の大將とあ云

れー加バ又左衛門尉肝を消し我柴田ガ旗下の属
 者とれ共存する旨のりるゆより先陣を由望よん
 嫡子孫四郎を従グもーむるといへども是も強
 て先陣を争ハせどとあく病ゆよつて引加へーと
 れバ誰もどグこころを知らしとるのあー然るを
 筑前守かく云そる、とまとぬ赤心を人の胸中お
 置と云ふべー恐ろしくと感心せられはるところ
 へ長九郎左衛門尉つと罷り出ーうバ筑前守より
 かうく云ひつゝふもとて消息を見せぬはれハ
 九郎左衛門尉うちかへーく是をよみく何さま
 右大臣殿の御跡ゆて天下の大將軍とありぬもん

ハこの人あるべーこの人とあまひハ小鋒を何り
 そひて家國を滅ぼしゆをんとぞぬ勿体なくゆ因
 て何となく御病氣と仰せ立られ引こりりあし
 けハ柴田勝てゆ譯り又筑前守勝ゆてゆ昔
 一からずゆ今度若殿の御帰城を幸ゆ御父子とゆ
 府中お御籠居然るべゆとゆハ利家も同心
 有りて早々馬をかへされゆり柴田がゆてハ又左
 衛門尉父子出陣あしとて何事かを欠くべきとへ
 らぬ体ゆて居とりにるゆ瀧川蟹江お籠城し清洲
 領を放火するゆより筑前守濃州へ進発せー由を
 さし出し北越の若殿をり秀吉の留守をさいをひ

ぬ切りかくり軍を始むべしと逸りけるを勝家聞
 て否左のりら秀吉留守あれども秀吉が構へ
 要害いづれも堅固小見の容易小切かくり人数を
 損じ益あるまじそのうへ小我大軍出て出張せ
 しを知らかり美濃國まで足あかく打出し筑前守
 何の心小得とは謀るべし血氣小まかせく推し
 寄せあれがはかりど小陥りんと如何小も残念
 ありあつハ筑前美濃へ行しといふがよと飲いつ
 そりろ知がごとすべし勝家小まかせとまへやと
 できりゆ許容せず
 三七殿再度柴田へ援兵を請ふ事

并勝家謀宇野某を敵陣へ遣む事

筑前守秀吉柳が瀬表岩の手配りを定め防禦の調
 略悉く諸將小教諭しいそ濃州へ馳せかへり大
 垣城小入や否同月廿七日より稲葉山及び瑞龍寺
 山の舟城ハつゝ小及はず岐阜本城へ押し寄せ大
 軍をりつゝ十重廿重小打かこみ只一挙小搦おと
 さんと鉄砲をうちかき火箭を放ちれば小櫓多門
 小燃船て焼上りけるおより城中りつゝの風小
 周章し寄手の陣を見こせど五色の吹貫天小ひ
 るかへりて長蛇の蟠ぶが如く雲龍の遊ぶ小似と
 り歌さんの馬印の數ハすで小數百小及で城を落

せし手柄を若めけ今由又數を添んずらん心
 由肝由動轉せりその由大旗小旗家々の紋か
 たるを見ふ小畿内の勢ハ云小及はず尾州濃州勢
 州江州由て予矢由とづさむる由との者ハ大加と
 向ひとり曉のあかりハ明星を焦一夜よりの折
 ハ遠峯谷小ひびさくかびとく援兵のむせ加
 たると日夜の引由切りぬ三七殿をぐめ城中あ
 ハ勝家出張とき、此方より打て出たりハ前
 ハ柴田と合戦家中まるべいのかぐり引あへて
 當方と戦をいとむとを得べらんやそのひよ濃
 州を平均江南へせめ入り安土を根城として軍

する由どまりハ筑前守をうち滅ぼさんて手間暇
 へべかりずと計りつる由思ひの由勝家をハ路
 次小砦を數ヶ処築きておさへ置直小筑前守當國
 へ立歸り如此大軍を以てとり巻き短兵急攻立
 るまれば當城の落去速かりと城中の男女老若
 うち寄り落支度をのみあはる由より持口くを
 固めとる諸物頭いづれも心なふありて如何ふ
 てかハ妻子を助けに身由始終安堵すべきや實
 由藥師寺公義が取ハう取ぬハ人のかたあり
 棄つべきりのハ弓矢ありり詠せし由今ハ我
 身の上小かこち呆れをきて居たりり信孝朝

大陽言ノ終卷十四

臣由せん方あく再度勝家の方へ合せし如く匠
作柳が瀬小出陣志とらん小ハ筑前守必定打て出
べし中尾山あり山深き処あり合戦不及びあハ
さし由の筑前守由進退と由合期しあさく軍尤
難儀あるべしそのと當方籠城して戦をさる
み時宜をそかりて切て出直小江南へ乱入し安土
を根城とあり筑前守を討べしと存トハ勝家出
張ありく由筑前守戦をいどまぐ却て処々小若を
さづき要害をかまへ置けて其身ハ直小當国へ引
返し當城をかこみしと十重をこえその上小鉄砲
火箭の足輕例より由多く由へ何時と云ことを

ありは城中焼上りし小より城中の老弱男女との
外困窮小及べり早く勝家出馬ありて援をる、小
非ずハ當城の落去數日の間小在べき唇込びて
齒寒しとりの當城落ハバ定て筑前守越前国へ
乱入いべくハ能々御勘考の上早々御手遣ひ待入
しとりされはる小より勝家大ハ仰天し然ハ筑前
守美濃国へかへりし美濃へ発向せし由ハ聞つ
れ共真偽定々ならずと油断せしと後悔臍をかち
どゆせんかとあり但し我今より岐阜を援をんと
すれハ路次ふさがりてたすく人馬を發すべか
りず又筑前守の居る長濱を攻抜んと由処々の要

大陽言ノ終卷十四

害堅固ゆいて急々攻破りがごとく但し路次の要
害よりとも何れどのと有りべき火急の押破りて
美濃へ乱入し三七殿と共に筑前守を狭みうつべ
し然りば天を翔り地を穿とぐハ逃れ、道行るべ
からば此時を過しと如何ゆきすべきと跳り上
りく齒をくひ志むり拳を握りてりごえ居たりけ
るが佐久間玄蕃を呼び寄せ三七殿の状を見せこ
の状の如く岐阜の危ふさと且夕小降り早く之を
すくふ小非ずハ氣むやゝ家三七殿御自害ゆても
や有べき方々一左のと小及びくも筑前守の
威勢濃州尾州勢州小ありぬべし只今ゆてど小

容易くりぬ筑前守ありそれハ尾濃勢の力を増た
りんゆハ弥以て制しがごとく岐阜の城いよ
だ落さるうち小當方加勢を出しるハ筑前守敵を
前後の受て軍すこぶる困窮すべし去りあがり美
濃路小うち入らん小と路次の若共をうち破りて
後あらざる路ひりまがごとく如何ゆきく此邊の
若を切りかどし美濃路へ發向すべきその方の意
如何ぞと問ひはれば玄蕃允志をりく思案し盛政
短才ゆいへとも敵地の容子ハ前以てより計り知
てハ東野山の要害小こりりハ堀久太郎秀政年若
くハ共弓矢の功者あると勿々尋常の者ゆいを

ず岩崎山小こりり高高山右近大夫大岩山の中川
瀬兵衛田上山の羽柴美濃守賤ヶ嶽の素山修理亮
いづれもぐ並々の侍おれぬとハ匠作お知
あふべくい然あがり是を攻て破られぬと云こと
ハかみく無ぐいへども味方も大分討死いこい
べト目てこの程より肝膽を碎き思慮仕ゆ小堂木
山あふく大りり山路將監正國ハ元来匠作思顧
の者おゆところ伊賀守へ附られゆおより此間ハ
匠作へ疎遠お打過いあるべ一尺今伊賀守の与力
と云を以て筑前守おハ属てゆへどもその本心の
如きハ匠作を疎く思ふべきりのおりゆと存ゆ

よつと誰おてもおれ將監と親一と者を遣をさし
將監が心を引て見ゆをやと存ゆ將監今ハ匠作の
恩を忘れずハそれお就て謀ゆべ一とアおより
修理進大およりこび共方の謀まよふ敵陣お
一人この方へ心を寄るりのお出来たらんハ國の
二ツ三ツも与力お属せより猶強くるべ一誰
ハ此使を勤めんりのぞと尋ゆるお佐久間が組下
の鉄砲頭お宇野忠左衛門と云りのり山路と同
國同里の者おハ將監とハ竹馬の友ありりり玄
蕃名このとを聞出しその夜あけてひそかお宇野
を呼び寄て近習を遠ざり只二人さ一向ハ如何お



大内言ハ多者ナリ

忠左衛門一大事の密議有りそれ由へ小招きあり假令いッテノトホくも玄蕃ガトを違背ありクミハ入れぬべしやと云へハ忠左衛門承り夜中といひ急々の要事と有る由て大方ハ推量して其事ヲ知らせぬ如く臆病の如く一度も相應ハ豫ごトあぐり共ニ心と云いのハリチリさば何國までも主ハ一人生命ありハ火の中水の底へも入れぬ否とハナサドと云ぬより玄蕃元より其方左いを了、あらんとハ存知ていへども試みかくハ云一あり一大事と云ハ別義ハ何れ其方ハ山路將監と入魂のあり承り及ぶよとハ

志加るやと云へハ忠左衛門いかも將監とハ同國同郷のよしみと云ハ竹馬のむかひより親しく語らひあれてハ只今敵味方と別れてハやへ良久く便宜も承りぬと答ふその時玄蕃ハごをすく免言あちハ其方山路方ハ相越し將監の本心筑前守ハ従ふ又ハ匠作のむかひの思を思ふそれを試みて告めり將監匠作のむかひの思を忘れずハ其方の力を以て將監小説て當方へ手かせしめぬへこの成就する小於てハ敵の首十甘うち取しより猶勝れる大功あるべしといへハ忠左衛門何さま仰ふ従ハ將監方へまかり越し

大内言ハ八扁卷ナリ

十一

大目言ノ終ニテ

弁舌をりつゝ其心をうごかし兔も角も返り忠の
月のぬあーいべーとりにれぬバ玄蕃名大いよろこ
び其方いよく骨折て山路を味方へ引入いハド羽
柴方の若一つ鉄炮の一発矢の一筋をも費やさぐ
打落しとると同じく其大の忠功とるべー随分手
をすゝあーく匠作の心を安くすべし勲功の賞ハ
直小行をるべさありと云ふあり宇野も一段と喜
悦し人多さ中ふ某一人この大役を蒙ると面目の
至し一命ふあり急度首尾しとるべしと山路が陣
中さして急ぎりり

重修真書大閣記八編卷之廿四終

BOOK 11

